
倭寇

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

倭寇

【Nコード】

N1415Y

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

戚継光は倭寇との戦いの中で自分達の作戦が読まれていることに気付いた。その秘密を探る為に彼がしたことは。この時代の中国はとかく倭寇に苦しめられていました。

第一章

倭寇

この時明朝は二つの存在に悩まさせられていた。

まずは北の遊牧民族だ。この存在にはそれこそ二千年程前からだ。この国においては常に抱えている問題と言ってもいい。まずはその彼等だ。

そしてもう一つはだ。南だった。北の遊牧民が馬を使うのに対して彼等は船を使う。その彼等こそ倭寇だった。

倭寇といつても色々だ。日本人だけではない。明朝の人間がなっている場合もある。しかし倭寇討伐にあたる者達の間ではだ。こんなことが言われていた。

「どうも我が朝の奸賊が多いな」

「そうだな。持っている武器が違うからな」

「日本の者は倭刀や鉄砲を持っている」

「それに鎧が違う」

倭刀とは日本刀のことだ。日本人だからこそ持っているものだ。

「その切れ味は半端ではないしな」

「鉄砲の威力も凄まじい」

「我が朝の鳥銃よりもまだな」

明では鉄砲は鳥銃と呼んだ。日本のそれを分けてあえて鳥銃と呼んでいるのだ。

「とにかく手強い」

「しかし我が朝の者達は大したことはない」

「所詮は只の賊だ」

「何ということはない」

こうしてだ。彼等については問題ないとされた。となると問題はやはりだった。

「日本人の者達だな」

「最近増えてきているしな」

「しかも妙に地の利がある」

「そうだな、最近の倭寇はな」

その日本人の倭寇達がだというのだ。

「どうも妙にこの辺りの地に詳しい」

「しかも我等の内実に詳しいな」

「そうだな。何時征伐に出るかわかっている感じだな」

「そして何処にいるか」

「そこまでわかっているのか？」

「ではだ」

そう考えていった。一つの疑念が出た。

「軍の中に誰が内通している者がいるのか」

「倭寇と通じている者がいるのか」

「だとすれば厄介だな」

「少し調べてみるか」

「そうするとするか」

そんな話になるのだった。そうしてだ。

実際にだ。そうした者がいるのか丹念に調べられた。ところがだ。そうした奸賊はいなかった。一人もだ。それはそれでいいことだった。

ところがそれならばだった。明朝の中で別の疑念が起こった。その疑念は。

「では何故倭寇達は軍に詳しいのだ」

「それはどうしてなのだ」

「我々のことに詳しいのだ」

「動きや数、そして」

「地の利まで」

そうしたことがどうしてなのかがだ。考えられるのだった。その中でだ。

倭寇討伐の指揮官である戚継光はだ。港において己の軍を見なが

らこう部下達に言うのだった。

青い海が先にあり木の港では船が並び軽い鎧兜を着た兵達が動き回っている。その二つを見ながらだ。彼は部下達に話すのだった。

「倭寇に通じている者がいないのは間違いない」

「それはですか」

「いませんか」

「そうだ、我等の中にはいない」

その討伐軍、ひいては明朝にはだというのだ。

「宦官達なら通じていてもおかしくはないがな」

「確かに。あの者達は」

「それこそですね」

「そうだ、それはおかしくない」

また言う戚継光だった。

「だが彼等は後宮にいてそこから出ない」

「この南ではですね」

「とても入り込む余地はありませんね」

「それはない」

宦官達は明朝においてはとりわけ腐敗していた。それがこの国の頭痛の種だった。しかしここは南方だ。後宮のある北京とはかなり離れている。それでは彼等もだというのだ。

「だからだ。我が朝で通じている者はいない」

「そうですね。それはです」

「はつきりしました」

「しかしだ。それでもだ」

戚継光は難しい顔になってだ。さらに話していくのだった。

第二章

「今の倭寇は我等のことを知り過ぎている」

「地だけではありませんから」

「我等が征伐に出る場所や数まで」

「実によく知っています」

「まるで我等の中にいる様な」

「そこまです」

「そこがおかしいのだ」

また言う戚継光だった。

「我々の中にいないのに何故そこまで知っている」

「ううむ、それは」

「どうしてでしょうか」

「そうしたことを考えるとだ」

戚継光の言葉は続く。その将らしい重厚な顔にいぶかしむものを見せながら。

「やはり倭寇は我々のことを知っているのだ」

「左様ですか」

「やはり知っていますか」

「そうして我等に対している」

「そうなのですか」

「そうだ。誰かが知っている」

戚継光はそのことにだ。考えを辿り着かせた。

「一体誰だ、それは」

「我々の中にはいませんね」

「それは」

「何度調べてもそうした者は見当たらない」

無論戚継光も調べている。彼の人を見る目は厳しいことで知られている。だがその彼が見てもだ。そうした者はいないというのだ。

「一人もな」

「では一体誰が」

「誰が倭寇にそれを教えているのでしょうか」

「一体」

「わからない。それがな」

そんな話をする戚継光と部下達だった。そこにだ。

将校の一人が彼のところに来てだ。こう告げるのだった。

「提督、商人が来ております」

「武具のことですか」

「はい、ポルトガルの商人です」

その国の者だというのだ。明朝も彼等との貿易を行っていたのだ。

「提督とお話したいとのことですが」

「わかった。それではだ」

「はい、こちらに呼びます」

そうした話の後でだ。ビロードの帽子に膝までの膨らんだズボン、それに黒い派手な上着に白いひらひらとしたシャツのだ。紅い髪の毛が来た。

髭も紅い。髪も髭ももじゃもじゃとしている。目は青く鼻は高い。まさに南蛮人であった。

その彼が戚継光の前に連れて来られたのだ。そのうえでだ。

彼はだ。笑顔で一礼してから言うのだった。

「御久しぶりです、提督」

「うむ、久しいな」

戚継光もだ。その南蛮の商人に応える。彼は提督として謹厳な表情を保っている。

「元気そうで何よりだ」

「はい、提督もまた」

「では今回はだ」

「何を買われますか？」

「南蛮の鳥銃を買いたい」

まさにだ。それをだというのだ。

「近頃倭寇の鉄砲に悩まされている」

「相当辛い戦いなのですね」

「とにかくだ。ここは」

苦戦していることについてはあえて言わずだ。商人に話すのだった。

「鳥銃を欲しい」

「幾つでしようか」

「兵に必要な分だけだ」

つまりだ。多く欲しいというのだ。

「それだけ欲しい」

「わかりました。それではです」

商人はその話を聞いてだ。戚継光にこんなことを言った。

「御願いがあるのですが」

「港の中を見たいのだな」

「兵の人達にどれだけ必要か見たいのです」

だからだ。商人は善良そうな顔で話すのだった。

「だからです。それに」

「それに？」

「他に何か必要であれば」

商人の顔は変わらない。その顔での言葉だった。

「それもまた」

「売ってくれるか」

「はい、お金があればです」

そうすると話す商人だった。ここでは商売人の顔を見せるのだった。

第三章

その顔でだ。戚継光に対してこうも言ってきた。

「では提督、早速港を」

「うむ、案内させよう」

こう話してだった。彼は商人に士官の一人をつけ案内させた。そのうえで自身は館に入り主だった部下達と共に次の討伐の話をするのだった。この話はすぐに終わったのだった。そして次の倭寇討伐の時にだ。

戚継光が兵達をそれぞれの船に乗せて倭寇討伐に向かう。だがその矢先にだ。

夜に船を進めているとだ。横からだ。

突如として銃声が響いた。鉄砲の音だ。

それで兵達からだ。悲鳴があがった。

「敵襲!？」

「まさか今か！」

「待ち伏せされていたのか!？」

士官達が夜の闇の中で口々に叫ぶ。

「まさかと思うが」

「ばれていたのか、今回の討伐が」

「それで待ち伏せをして」

「夜に襲つて来たのか!？」

「信じられん」

士官達は驚きを隠せない。しかしだ。

倭寇達は鉄砲だけでなくだ。刀もあるのだ。その彼等の刀がだ。討伐軍を襲う。小舟で近付く彼等は明の船に次々に乗り込みだ。

士官達も兵達も斬っていく。それに対してだ。

戚継光は自ら剣を抜き指揮にあたる。伊達に倭寇討伐で名を挙げた訳ではない。彼は冷静だった。

「各船に告ぐ！」

「はい、提督」

「どうされますか」

「倭寇達には槍だ！」

それを使えというのだ。

「それで突いて海から落とせ！」

「海にですか」

「落とせというのですね」

「そうだ、落とすのだ」

討ち取るのではなくだ。そうせよというのだ。

「小舟は見つけ次第体当たりするのだ」

「そのうえで小舟を沈める」

「そうして倭寇ごと」

「乗り込もうとする者は槍で突け」

「まただ。槍だった。」

「とにかくだ。今は防げ」

「わかりました」

「それでは」

こうしてだった。彼等はだ。戚継光の指揮の下小舟に体当たりし倭寇達を竹を笹がそのまま付いたままで槍にしたそれで突き寄せ付けず海に落としていく。そうして何とか朝まで凌いだのだった。

だが朝になってみるとだ。多くの兵達が倒れていた。士官も多く死んだか行方が知れなくなっていた。海に落ちた者も多い様だ。

倭寇達は逃げ去っている。しかしだ。明軍の損害はあまりに多くこれ以上進むことはできなかった。戚継光も退くことを決意した。だがこの失敗からだ。彼はこう言うのだった。

「やはりだ。漏れている」

「こちらの動きがですね」

「それが」

「そうだ。それにだ」

今彼等はあの館の中にいる。言うならば司令部である。堅固であり簡素な戚継光らしい館だ。その中の一室で卓を囲みながらその攻撃を受けたことを話すのだった。そうして戚継光は険しい顔でこんなことを言うのだった。

「敵の鉄砲だが」

「鉄砲ですか」

「それですか」

「敵は明らかに我々を待つて狙っていた」
「それも話す彼だった。」

「実に細かいところまで知っているな」

「では間違いないですね」

「我々の動きは倭寇に漏れていますね」

「誰かが漏らしている」

「だとすれば」

「中にいないとすれば外にいる」

戚継光はここでこう言った。

「外にだ」

「外にといえますと」

「それは一体」

「誰でしょうか」

「倭寇の武器は手に入っているか」

戚継光がここで部下達に問うのはこのことだった。

第四章

「それはどうだ」

「刀ですか」

「そして鉄砲ですか」

「そうだ、それは手に入っているか」

そのことをだ。問うのだった。

「それはどうなのだ」

「はい、それでしたら」

部下の一人がだ。その問いに応えた。

「手に入れております」

「それを見せてくれるか」

戚継光の言葉はいよいよ鋭く強いものになってきていた。

「今ここぞだ」

「わかりました。それでは」

「持って来てくれ」

こうしてだ。その夜襲を仕掛けた倭寇の武器が戚継光の前に出された。その中には彼等が使ったあの鉄砲もあった。最初に撃つてきたそれだ。

その鉄砲を見てだ。戚継光は言うのだった。

「この鉄砲に見覚えはあるな」

「！？それはまさか」

「まさかと思いますが」

「それは」

「そうだ、そのまさかだ」

彼は目を丸くする彼等に述べた。卓の上に置かれたその鉄砲を見ながらだ。

「これこそがだ」

「夜襲の謎ですか」

「それなのですか」

「中にいなければ外にいる」

またこう言う戚継光だった。

「そういうことだ」

「ではここはです」

「どうされるべきでしょうか」

「一体」

「考えがある」

戚継光の言葉は冷静なものだった。

「それを今から話そう」

「はい、それでは」

「御願います」

こうしてだ。戚継光は主だった部下達にだ。部屋を別の、彼の私室に移したうえでその話した。そうしてそのうえで次の倭寇討伐にあたるのだった。

次はだ。本拠地に向かう。倭寇のだ。

そして彼等はだ。攻めていく。その本拠地の近くにだ。

かなり入り込んだ場所だった。海岸がでこぼことしていて山になっている。そうした場所だからだ。倭寇達が本拠地に使っているのだった。

幕僚の一人がだ。戚継光に問うた。

「こうした場所だからですね」

「そうだな。倭寇達もな」

彼等は船に乗っている。その甲板に出てだ。二人で話すのだった。その周りには他の幕僚達や兵達がいる。そしてだ。

他の船もある。そこに兵達が揃っている。誰もが警戒してだ。倭寇が来ることを恐れていた。

その中でだ。戚継光は言っただった。

「潜んでいるのだ」

「ここが本拠地ですか」

「本当の本拠地は別の場所だ」

「別のですか」

「そこにあるのですか」

他の幕僚達も話してきた。

「ここではなく」

「他の場所に」

「今討伐する倭寇は日本人の倭寇だ」

これが重要だった。倭寇は日本人の倭寇だけではない。それがまた実に厄介な問題になっているのだ。

「それなら本来の本拠地はだ」

「日本にあるのですか」

「そこにですか」

「そうだ。だがここを潰せばだ」

どうなるのか。戚継光が言うのはこのことだった。

第五章

「この倭寇の力は大きく削がれる」

「日本に退くしかなくなる」

「そうなるというのですね」

「今我々を最も悩ませているその倭寇は」

「我が明朝を脅かさなくなりますね」

「そうだ。だからこそだ」

何としてもという口調になった。戚継光のそれがだ。

「わかったな。討伐するぞ」

「はい、しかしです」

「この場所を通るのは」

「かなり危険ですね」

幕僚達は周囲を見回す。彼等の前後左右は複雑な突起状になっている海岸だ。何かが身を隠すにはだ。まさに絶好の場所であった。

そこを進みながらだ。彼等は話すのである。

「何時倭寇が来てもです」

「どうなるかわかりません」

「何時襲われてもです」

「危険です」

「そうだな。しかしだ」

戚継光は腕を組んでだ。己の幕僚達に話す。

前を見据えてだ。そうして言うのだ。

「手筈通りだ」

「その通りにすればですね」

「討伐できる」

「そうなのですね」

「物事がわかればだ」

どうかとも言う戚継光だった。

「対処は容易い」

「何もかもがわかれば」

「そうなのですね」

「そうだ。だからあえてここに入った」

「そうだというのだ。」

「こうしてな。さて」

「はい、何時来てもですな」

「用意は出来ています」

「兵達に伝えよ」

戚継光は前を見据えてだ。腕を組んだ姿勢で告げた。

「敵が来ればだ」

「はい、その時はですな」

「一気にですな」

「そうせよと」

「そうする。いいな」

こう話しながらだ。戚継光率いる討伐軍の船団は先に進んでいく。そしてだ。

不意にだ。明の兵達はだ。

休んだ。動きを止めたのだ。

それを受けてかだ。四方八方からだ。

倭寇の軍勢が出て来た。どの者達もだ。

鉄砲を持ちそして刀を持っている。日本の鎧を着ている。身軽に動けながら頑丈なだ。実に厄介なその鎧を着ている彼等がだ。

小舟を器用に操りだ。出て来たのだ。その彼等に対してだ。

戚継光はだ。己の軍に指示を出したのだった。

「いいか」

「はい」

「あれですな」

「今こそあれをですな」

「前に進む」

そうするというのである。そしてだ。

実際に前に出てだ。そのうえで兵達に命じるのだった。

「鳥銃を一斉に放て！」

「はい！」

「わかりました！」

兵達はそれに従いだ。すぐにだ。

前にいる倭寇の軍にだ。鳥銃を一斉に放ちだ。それからだった。

怯む彼等に突っ込みだ。あの竹をそのまま使った槍でだ。

倭寇達を蹴散らしていく。そこからさらに船団を動かしてだ。

戸惑う倭寇達を攻めていく。今度はだ。

第六章

「散れ！」

「そして各船で、ですね」

「倭寇に対する」

「そうするということですな」

「そうだ、そうするのだ」

戚継光の編み出した戦術だ。倭寇の持つ鉄砲の威力があまりにも強いのでだ。それであえて軍を散開させてだ。損害を減らしたのだ。それを使った。各自戦えというのだ。

「わかつたな」

「了解です！」

「では！」

「いいか、戦え！」

こう話してだ。彼等はだ。

次から次に攻めていく。今は倭寇を圧倒していた。

不意を衝くつもりがだ。思わぬ攻められ方をした倭寇達は総崩れになった。それでだ。

多くの者が捕らえられ本拠地も攻め落とされた。そうしてだ。

捕虜の中にはだ。あの者もいた。

「やはりいたな」

「うう………」

「いるだろうと思っていた」

倭寇達の中にだ。あのポルトガルの商人達もいた。彼は倭寇達と共に縛られた。戚継光の前に引き出されていたのである。その彼を見てだ。

戚継光はだ。さらに言うのだった。

「そなた、我が軍のことを見ていたな」

「その通り」

縛られ頂垂れた顔で胡坐で座っている商人はだ。声だけはふてぶてしく答えた。

「その数や武器のことも」

「そうだな。それに館にも入っていたな」

「如何にも」

その通りだとも答える商人だった。

「そうして」

「我々の作戦の話を聞いてだな」

戚継光はその商人を見下ろしながら言っていく。

「倭寇達に話を流していたか」

「貴方達と彼等が戦えばだ」

どうなるか。商人は話すのだった。

「私の武器が売れる」

「鳥銃がだな」

「鉄砲とも言う」

どの呼び名にしてもだ。彼の売るものだった。

それをだ。売ってだというのだ。

「私が儲かる。だから貴方達のことを彼等に知らせていた」

「むしろ倭寇達に暴れてもらっていたな」

戚継光はこのことも見抜いていた。彼の実態をだ。

「そうしてだな」

「何のことだ」

「倭寇が暴れ多くのものを奪い取る」

倭寇の目的は略奪だ。商売に来ている者もいるにはいるがだ。問題になっているのはそうした密売の者達よりも海賊の倭寇なのだ。

倭寇とは主に彼等のことを言うのだ。

「その奪い取ったものを自分も手に入れる為にだな」

「私は倭寇に入っていたというのか」

「そうだな」

商人に対して問うた言葉だった。

「違うか」

「そうだとすればどうするのだ」

「そのことについては何もしない」

彼が倭寇である。そのことについてはというのだ。

「それは言っておこう」

「ふん、確かに私は倭寇だ」

商人は開き直って答えた。実にふてぶてしい態度でだ。

「彼等の中に入ってた。そして利を得ていた」

「その通りだな」

「しかし。それも終わりか」

商人は俯いてだ。そうしてこう言った。忌々しげな顔で。

「私は」

「わかっているな。捕らえられた倭寇はだ」

「処刑か」

「それはもう決まっている。大人しくするのだな」

「……くっ」

こうしてだ。このポルトガルの商人は日本人の倭寇達と共にだ。

首を刎ねられたのである。残った倭寇達は明での本拠地を失いだ。

日本に逃げ帰った。

そうしてだ。威継光はだ。部下達のその話を聞くのだった。

「今回はです」

「中々厄介ですね」

「全くでした」

「本当に」

「そうだな。私も今度は困った」

威継光自身もそうだというのだ。彼等は港で話している。彼等が

基地としているその港においてだ。

「内通者はいなかった。では何故倭寇が我々のことを知っているの

か」

「しかしあの商人がいた」

「彼が倭寇だった」
「だからですね」
「我々のことが漏れていた」
「そうだったのですか」
「そうだ。倭寇は日本人の倭寇だけではない」
「彼等だけではないということとはだ。もうわかっているのだった。」
「我が朝の奸賊共もいるしな」
「そしてポルトガル人にもですね」
「いるというのですね」
「どの国にもよい者もいれば悪い者もいる」
「戚継光はこの現実も話した。」
「そういうことだ」
「ですね。提督、それでなのですが」
「今度の戦ですが」
「部下達はあらためてだ。彼に話すのだった。」
「また別の倭寇が来ております」
「そちらにも」
「わかつている。また戦う」
「戚継光は前を見据えながら彼等に答える。」
「我等の戦は倭寇が消えるまで続くからな」
「はい、それではまた」
「明の為に戦いましょう」
「部下達も応えてだ。そうしてであった。」
「彼等はまた戦いに向かうのだった。明の名将戚継光は倭寇討伐でその名を残している。その彼の戦の中にはだ。こうした厄介なものもあつたのである。だが彼はそれに勝ちだ。倭寇から国と民を守っていた。そのことをここに書き残しておくことにする。」

2
0
1
1
·
4
·
2
2

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1415y/>

倭寇

2011年11月2日02時08分発行